

戴冠と畏

キルヒアイスがフロイデン山地へ赴いたのは二月十八日。ラインハルトの戴冠式は四日後に迫っており、『ブリュンヒルト』はずでに隣接するリンダーホーフ星系に入っており、ヴァルハラ星系まではあと数回のワープを残すのみの宙域にあった。

窓外に、厳冬期の最中にあるフロイデン星系の、麓までを純白の積雪に覆われた巨大な山容が広がっている。搭載された望遠カメラの映像の中央、広大な山麓の一角に僅かに姿を覗かせたアンネローゼの山荘が、今にも雪の中に埋もれてしまいそうで、ひどく心細げだった。

ジェット・ヘリの座席に長身を埋めたキルヒアイスは、窓外に広がる純白の風景と、スクリーンとに交互に視線を送っている。フロイデンの山嶺が地平線をせり上がってくるにつれ、その視線がスクリーンに固定する時間が次第に長くなってくるように、ヒルダには思われた。

ジェット・ヘリの窓外に迫ってくるフロイデンの山々の偉容は、ヒルダにとつても初めて目にするものだった。ゴールデンバウム王朝の始祖ルドルフの勅命が、この山系周辺の航空機通過を厳禁してすでに四五〇年余りが過ぎている。つまり、自分たちは四五〇年余りの間で、鳥以外で初めてこの空域を飛んだ生物ということになるのだろう。エルウィン・ヨーゼフ二世の退位とゴールデンバウム王

朝の終焉に伴い、歴代皇帝の公布した勅令はすべて無効となった。その結果として、フロイデン山系での飛行禁止もまた無効となった。どこにでも目敏いと言つべきか、あるいは小才の利く人間というのはいるもので、勅令の無効化を見越して一儲けを企んだ人間も少なくはなかつたらしい。皇帝の裁定によって所有者の決定された不動産が狙われた。所有者がその地に不在であるのを利用して、帝国政府に『現時点での実効支配』により既得権を認めさせようとしたもので、実際に『所有権確認』の申請は、この数日間に数千万件にも達したと言つ。

お気の毒に、というべきかも知れない……とヒルダは思う。ゴールデンバウム王朝の終焉と勅令の無効化を宣言する際、ラインハルトは彼の戴冠までの数日間、帝国全土をローエングラム元帥府による軍政下に置く旨を布告させていたのだ。

『ローエングラム元帥府は、暫定措置としてゴールデンバウム王朝による勅令で、本日時点で有効と認められているものについて、すべて効力を継続するものとして扱つ』

これは公然と宣言されたものではなかつたが、法律的には完全な効力を持つ内容であつたから、数千万件の『所有権確認』申請は、ほとんど瞬時に却下の憂き目を見た。だけでなく、申請自体が申請者の不法占拠の証拠と見做され、濡れ手に粟の儲けを夢見た『目端の利く』人々は、一転して犯罪者の汚名を被る羽目に陥つた。

とは言え、これはあくまで暫定措置であり、フロイデン山系の飛行禁止措置を含め、不要不急とされた勅令は続々と廃止されつつある。

フロイデンのアンネローゼの山荘を、ヒルダはこれまで二度、

訪れている。正確には山荘の中まで入ったのは一度だけで、二度目は山荘と連絡を取るための警備所までである。この日も、当面の目的の地は、その警備所だった。いかなる人間と言えどもアンネローゼの隠棲する山荘を直接訪れてはならない。とするラインハルトの命令は未だ有効だった。正確には、先帝エルウィン・ヨーゼフ二世の名で出された勅令はまだ効力を持つとされている。

実際には、それは形式論に過ぎない……ヒルダは知っている。たとえ、ラインハルトが既に皇帝の座にあり、幽閉解除と訪問自由の命令を発したとしても、この場合はアンネローゼ本人がそれを受け入れなければ、命令は何の実効も持ちほしめないのだ。

『あと二〇分で、警備所の駐機場に到着します。天候はほぼ快晴。気温、氷点下一度、北北西の風三メートル。着陸には何の問題もありません。受動レーダーには乱気流の検知無し』

操縦室からの声が響いた。片道六時間をかけて、地上車ではるばる訪れていたフロイデン山麓が、今では一時間で到達可能な地域となっているのだ。

「このままフロイデンへの飛行が全面的に許可されるようになるのでしょつか」

ふと思いついて、隣席の赤毛の若者にヒルダは問うてみた。飛行禁止を含め、地上車の無制限の進入も禁じられていた。一部の有力貴族にのみ与えられた特権ではあったが、結果としてルドルフが遷都した当時のままの自然がそのまま残される上での功績も否定できないのだ。

「無制限に……とはいかないでしょう。学芸省と内務省の間での調整事項の一つになっています」

こともなげにキルヒアイスは答える。その表情がやや硬いように見えるのは、ヒルダの主観というだけではなかった。キルヒアイスがヒルダにフロイデンへの同行を依頼してきたのは昨夜のことである。

『アンネローゼさま……いえ、グリューネワルト伯爵夫人を説得する自信がないのです』

この人でもこういう表情になることがあるのか。映話の中の映像に、ヒルダは驚かなかったと言えは嘘になる。

「お聞かせ頂きます、キルヒアイス提督。伯爵夫人……いいえ、アンネローゼさまが、どうしてフロイデンからお出でにならないと考えるのかを」

「伯爵夫人はローエングラム公に仰おっしゃったそうです。キルヒアイスはあくまで公的な呼び方を崩さない。」

「自分にゴールデンバウムの影を見る人がなくなったら、呼び戻しを欲しいと……では、ゴールデンバウムの影とは何でしょうつか」

ヒルダは僅かに躊躇う。アンネローゼは先帝、いや先々帝フリードリヒ四世の寵姫だった。フリードリヒ四世のアンネローゼに対する耽溺ぶりは、帝国内では余りに有名であり、アンネローゼが決して公的な場に姿を現さなかったにもかかわらず、公的な文書のほとんどが彼女をして『フリードリヒ四世の実質的な正妃』と記載しており、『正史』の中にも、『寵姫の一人にグリューネワルト伯爵夫人の称号を贈り、事実上の妻の座を与えている』という一節が残されているほどである。

「アンネローゼさまは、ローエングラム公の姉上でいらっしやいます。でも、帝国のほとんどの人々は、先々帝の後宮の住人としてし

か、アンネローゼさまを見ない。アンネローゼさまはそのことを仰ったのだと思います」

「その通りだと思います」

キルヒアイスはスクリーンから目を離し、積雪の銀白と快晴の蒼とに二分された窓外に視線を走らせた。陽光に照らされた横顔の顔色は良いとは言えず、アンネローゼとの久方ぶりの再会への喜びよりも苦悩の彩りが濃い。

「……であれば、今の段階で伯爵夫人からその影を消せたと云えるでしょうか」

「それは……」

さすがにヒルタも口にするべき言葉を一瞬見失う。アンネローゼがフロイデンに隠棲したのが、帝国暦四八九年一〇月。以来一六ヶ月という時間は、帝国の住民からアンネローゼへの記憶を消し去るには決して長いとは言えない。

いや、それよりも……ヒルタは、一六ヶ月前、彼女に『ラインハルトのことをお願いしますね』と微笑んだ時のアンネローゼの表情を思い出していた。あの柔らかな笑みの下には、硬い鋼の意思が潜んではいなかったか。アンネローゼは自らの幽閉が二年や三年で終わるとは決して思っていなかったのではないか。もはや二度とフロイデンから出ることはなく、生涯をあの地で終わることを覚悟していた、そんな表情ではなかったのか。

ヒルダは慌てて首を振った。そんなはずはない。確かにアンネローゼは再び世に出ることを望んではいない。『フリードリヒ四世の実質的な正妃』など、彼女が望んで得た立場ではなかったはずなのだから。だが、それは一生を世捨て人として、フロイデンの山麓

に終わることと同義ではないはずだ。

だが、同時にキルヒアイスの問いも重い。アンネローゼの姿から旧王朝の影を拭い去るとは何を意味するのか。

「アンネローゼさまを……『ゴールデンバウムの係累と見なす人々』がもしいるとすれば……」

ラインハルトにしてもキルヒアイスにしても、アンネローゼを『ゴールデンバウムの係累』などと呼ぶのは非常な苦痛だろう。ヒルダの口調がいつもの切れ味を欠くのもやむを得なかったが、キルヒアイスは軽く首を振って苦笑する。

「それは、アンネローゼさま……伯爵夫人が最もそのことを気にかけておられることを、わたしは知っています、フロイライン・マリィンドルフ」

「それは……?」

「ご自身から、直接に聞いたのです」

軋るような声。苦悩と苦痛を緋い交ぜにして、そのまま声にしたような口調は、帝国軍随一の不敗の驍將、いずれ帝国宰相としてローエングラム王朝下の帝国政府を裁量すべき若者にはおよそ似つかわしくないものと言えた。

と胸を突かれる思いに襲われ、ヒルダは思わずキルヒアイスの横顔を仰ぎ見る。

「アンネローゼさまが……ご自分をゴールデンバウムの係累……だと?」

「その通りの言葉ではありません。ですが、ほぼそれに近い意味のことを仰ったと思って下さい。比喩だとか、第三者からは形としてそつ見えるだとか、そついつことではなく……」

それ以上語るのを勘弁して欲しい。苦いものを飲み下すように食いしばった口許に、ヒルダはそれ以上の問いを放てなかった。

ヒルダが、もし帝国貴族の一般的な子女のように、今少し恋愛遊戯……あえて感情とは言わない……に長けていたならば、あるいはアンネローゼがキルヒアイスに告げた言葉をそのまま察し得たかも知れない、その智謀一個制式艦隊に勝ると言われたヒルダだが、それでも苦手なものはあり、それがこの分野に関する知識と実践(?)だったのだ。

『あと五分で着陸です。シートベルトを確認して下さい。警備所からの連絡によると気温氷点下二度。風は北北西三メートル変わらず。駐機場から警備所までは少し離れていますから、防寒具は確認しておいてください』

コクピットからの割り込みに、ヒルダはかえってほっと息をついたほどだった。軍から借用した厚手の冬山用防寒ジャケットのジッパーを引き上げる。キルヒアイスもそれに倣った。

その僅かな間に、ヒルダの脳裡で考えが回転し、結論が結晶となって浮かび上がってくる。アンネローゼをゴールデンバウムの係累者として捉えるならば、新皇帝ラインハルトに対して彼女が姉としての影響力を行使すること。これこそが、旧王朝への憎悪を抱く人々……思わず、時に異様な光を放つ義眼を思い浮かべ、ヒルダはその映像を脳裡から振り払う。あの義眼の参謀長のように、旧王朝を断罪すべき、葬るべき敵としてのみ受け止める人々にとって、それが最大の懸念に違いない。

同時に……座席の中で、ヒルダは撃たれたように身を強ばらせた。それだけではない。キルヒアイスの存在がある。

『着陸します』

突き上げるような衝撃と、一、二度バウンドするような感覚が通過すると、ガス・タービンエンジンの甲高い回転音が次第に緩んでいく。

「到着しました。足許に気をつけてお降りください」

パイロットの快活な声とともにドアがスライドし、強烈な寒風が吹き込んで来た。滑走路の彼方……とは言え、ジェット・ヘリ専用であるから数千メートルも離れているわけではなく、せいぜい二〇メートルという所だっただろう。見覚えのある警備所の建物が、周囲に白い障壁を積み上げて佇んでいた。

案内されたのは以前使ったことのある直通^{ホットライン}回線の部屋ではなかった。

「こちらは、キルヒアイス閣下がお使いになることは禁じられておりますので」

応対に出た中尉は、ヒルダの記憶にある人物とは違ってしたが、歯切れのいい口調と小気味のいい身のこなしは共通していた。

「こちらの通話はすべて公的な記録として録音・録画されており、予めご了承ください」

「分かっています。ありがとうございます」

鮮やかな敬礼。キルヒアイスが答礼すると、カチリと音を立てて踵が打ち合わされ、中尉は通路の彼方へ姿を消した。

『ジーク、それにヒルダさん』

映話スクリーンには既にアンネローゼの姿があった。キルヒアイスが小さく安堵の息をつくのがヒルダにも分かった。一六ヶ月に

も及ぶ実質的な幽閉である。帝都オデイクよりも春が二ヶ月遅く、冬の訪れが二ヶ月早い。しかも、山荘はこの警備所からも更に標高差のある高原地帯の入り口にあり、厳冬の厳しさは言うまでもない。キルヒアイスが、アンネローゼが健康を害する危険から自由でいられなかったとしても、それは当然すぎることだった。

ヒルダの目から見て、アンネローゼには、少なくとも外見上の変化はなかった。一四ヶ月前、この警備所でスクリーン越しに会話した時の姿そのままと言って良く、艶やかな金糸を思わせる髪も、濃いサファイア色の瞳にも僅かほどの変化も見られなかった。

「お久しぶりです……ア、いえ、伯爵夫人」

アンネローゼさまと呼びかけようとしてから、これが録音されている公式回線であることを思いだしたのだろう。キルヒアイスの口調が重い。アンネローゼは何か言おうとして、それから彼の言葉を待つかのように口をつぐんだ。

「……明後日、ローエングラム公が帝都オデイクに戻られます。さらにその二日後、ローエングラム公は正式に戴冠され、初代のローエングラム王朝皇帝とされます」

およそキルヒアイ斯拉しからぬ、いかにもぎこちない話し方。どうしてアンネローゼさまと呼び、ラインハルトさまと呼べないのか……そんなキルヒアイスの内心が聞こえてくるような気がして、ヒルダは胸が重くなった。

「こんな間際になってしまったことは重々お詫びします、伯爵夫人。ローエングラム公から、伯爵夫人には戴冠に臨席を頂きたく、この地をお出でになって帝都オデイクへ赴かれるよう、ご命令を頂いて参りました」

ちょっと不思議そうな表情になり、アンネローゼは僅かに首を傾げた。

「ラインハルトが皇帝になるのですね。その戴冠の式にわたしに出席せよと」

「その通りです。伯爵夫人に対する幽閉措置は、ローエングラム公の戴冠を以て解除し、以降、伯爵夫人には大公グロスヘルツォーギン妃としての称号が贈られることになります」

「大公グロスヘルツォーギン妃？」

再び不思議そうな表情で、アンネローゼはまっすぐにキルヒアイスを見た。キルヒアイスも顔を上げ、正面からアンネローゼの視線を受け止める。緊張の余りか、首筋の筋肉がぎりぎりと言を立っているのではないか。ヒルダにはそう思われて、二人の間に視線を往復させる速度が速くなりすぎ、こちらも首筋が悲鳴をあげそうになった。

「ジーク……」

アンネローゼはキルヒアイスを「キルヒアイス上級大将」、あるいは「キルヒアイス提督」などと呼ぶ気はなさそうだった。

その呼び方が、後に続く言葉を予想させ、キルヒアイスはさらに表情を強ばらせた。

「それはわたしにグリーネウォルト大公グロスヘルツォーギン・フォン・グリーネウォルト妃を名乗って、新しい皇帝の姉として、戴冠するラインハルトの傍に立ちなさいということ言っているの？」

「それは……そうです。大公グロスヘルツォーギン妃をお名乗りになるかどうかは別にして、ローエングラム公は、伯爵夫人……」

一瞬下を向き、キルヒアイスは跳ね上げるようにして顔を上げ

た。

「いえ、アンネローゼさま。ラインハルトさまは、アンネローゼさまに自分の戴冠を見届けて欲しいと、そう仰っています」

「あなたは、ジーク。あなたも、わたしと一緒にラインハルトの戴冠を見届ける役になるの？」

「ラインハルトさまは、わたしにそれを求められました。わたしに、その権利と、義務があると仰っています。ですが……」

「何でもあなたに相談して、あなたの忠告に耳を傾けなさい。得たものは独り占めにしないで、必ずあなたと分け合いなさい。そう、ラインハルトに言ったのはわたしです、ジーク。だから、あなたはその席にいななければいけません。ラインハルトが皇帝になる姿を見届けるのが、あの子の親友としてのあなたの権利だし、あの子をここまで来させた者としての義務です、ジーク。でも、わたしは……」

その後、続くべき言葉を察した瞬間だった。

紅玉ルビを融かして染めたと評される、見事なまでの赤毛を翻し、キルヒアイスがスクリーンの中に躍り込むように半身を乗り出したのだ。アンネローゼの澄明すぎるほどの表情が、晴天下に一点だけ現れた雨雲のような翳りを走らせた。

「アンネローゼさま、せめて帝都オイデインにまではお出ましになって下さい!!」

叫ぶようにして、キルヒアイスはアンネローゼの言葉を遮った。いつもの、抑制の行き届いたキルヒアイスの声ではない。傷つけられ、自制を失った少年の悲鳴そのものに似た響きに驚愕したようにアンネローゼの青い目が大きく瞳られる。透き通った碧玉の瞳に、蒼白な表情で身を乗り出しているキルヒアイスの姿が小さく映っ

て見えた。

「ジーク……」

「どうか、このままフロイデンを出ないなどと言わないでください、アンネローゼさま。確かに、まだ、アンネローゼさまが望まれたことはできていない。できていませんが、だからといって帝都オイデインにすらいらっしやらないとすれば、ラインハルトさまはどつなるのです!!」

「ラインハルトが……?」

「そうです。ラインハルトさまはアンネローゼさまが戻られるのを待っておられるのです。戻ってこられると信じておられるのです。ゴールデンバウムの王朝を葬って、フェザンを征し、同盟を下し、アンネローゼさまがわたしたちの前から連れ去られてから一三年です。一三年もかかって、やっとここまで来たのです。もし、アンネローゼさまがこのままフロイデンに留まられたなら、ラインハルトさまは、この一三年はすべて無駄だったと思われてしまいます。わたしは、ラインハルトさまにそんなことを思って頂きたくない!!」

「ジーク……あなたには分かっているはずよ。わたしが今、ラインハルトやあなたの許に戻るのには、あなたたちにとって良くないことだということが、まだ、早すぎる。早すぎるの、分かって、ジーク」

「分かりません!!」

吠えるような声。完全に一人の会話から置いて行かれたヒルダは、彼女にとつて珍しいことに、ただ唾然として、両眼を丸くしてその光景を見詰めている以外の選択肢を採れなくなっていた。

「分かりたくありません、アンネローゼさま!!」